

朝鮮半島磨製石剣研究の動向と課題

平郡達哉

1. はじめに

朝鮮半島青銅器時代文化を構成する要素のひとつに磨製石器の盛行がある。なかでも日常生活の道具としての磨製石器以外に支石墓や石棺墓などの副葬品として製作された磨製石剣の多様性、盛行が朝鮮半島における特徴といえる。磨製石剣は東北アジアでは中国東北部から朝鮮半島、北部九州・瀬戸内西部において見られるが、その分布と数量からみてその中心地は朝鮮半島にあるといえる。

これまで幾人かの研究者によって朝鮮半島青銅器時代の磨製石器特に磨製石剣の研究史について論文発表当時までの詳細な整理が行われているが〔甲元 1972a、田村 1988、金 1994、金 1996、朴 2004、孫 2006a・b、孫 2008〕、ここではそのような朝鮮半島から出土した磨製石剣について研究の流れを巨視的に概観し、現時点までの研究動向と今後の課題について整理してみることにしよう。

2. 時期別の研究動向

朝鮮半島出土磨製石剣に対する研究の歴史は、代表的な論文の発表や研究内容の傾向を基に6つの時期に分けることができる。

I 期：朝鮮半島出土磨製石剣に関する認識の高まり（1939 年以前）

朝鮮半島でのいわゆる考古資料に対する記述は古くは高麗時代にまでさかのぼり、朝鮮時代においても若干の言及が見られる〔李 1988〕。そのような記述の中には磨製石鏃に関する情報はあるものの磨製石剣に関する記録は見られない。

磨製石剣に関する記録としては、1886（明治 19）年に神田孝平が開城から出土したと伝わる磨製石剣を『東京人類学会報告』の「雑記」にスケッチと共に紹介したものが現時点で最も古いものと考えられる〔神田 1886、八木 1915〕。

磨製石剣が朝鮮半島の歴史を物語る資料として認識されはじめたのは、20 世紀初め以降、朝鮮統監部及び朝鮮総督府による植民地経営事業の一環として行われた文化遺跡調査の開始と時期をほぼ同じくする。つまり、朝鮮半島における考古学導入の時期と関係を有するといえる。

具体的には、朝鮮半島の「磨石器時代」を石斧・石鏃など種類別の磨製石器を概括するなかで磨製石剣について言及した八木庄三郎は平安南道龍岡郡温井郡で採集された磨製

石剣の切先を紹介しているが、図面は提示されていない。また、慶州外東面冷川里の諸鹿央雄氏採集品、清道発見品、李王家博物館旧蔵品などについても紹介している〔八木 1915〕。

鳥居龍蔵は 1911～16 年の間に 6 度の朝鮮半島踏査（一部で発掘調査）を行い〔鳥居 1953〕、そのうち、平安南道・黄海道における先史遺跡調査の報告を行った〔鳥居 1917〕。報告では調査の過程で採集した磨製石剣について概略を記している。また、前年に忠南扶余で墳墓 4 基を発掘した際に磨製石剣が出土したことを挙げて、その用途として武器としての実用以外に副葬用としての機能についても言及している〔鳥居 1917〕。

この時期に初歩的な分類を試みたものとして、梅原末治〔梅原 1922〕と高橋健自〔高橋 1925〕の研究がある。各々分類案を提示しているが、明確な分類基準があったわけではなく、形態分類に近いものになっていることは批判された〔有光 1956〕。

上記の論考で扱われた資料は出土遺構、出土状態の不明な採集・収集品がほとんどであったが、全南高興郡雲垈里^{ウンデリ}や大邱大鳳洞^{テボンドン}など支石墓の埋葬主体部から磨製石剣が出土することが確認されはじめた〔小泉 1986、藤田 1937・1940〕。

以上のように I 期は朝鮮半島出土磨製石剣が世に知られはじめ、朝鮮半島・日本列島出土の金属器研究との関連で青銅剣・鋌の石製模倣品としての位置づけのなかで集成・分類が試みられた時期であるといえる。また、発掘調査を通して磨製石剣が墳墓の副葬用として製作されたことが確認された。

II 期：有光教一による磨製石剣研究の開始と『朝鮮磨製石剣の研究』刊行まで（1939～1959 年）

この時期は有光教一による磨製石剣に対する一連の研究が発表され、その成果として『朝鮮磨製石剣の研究』が刊行されるまでの時期である。

朝鮮総督府博物館に勤務していた有光教一は、1939 年に朝鮮半島出土の磨製石剣に対する最初の本格的な論考を発表した。そこでは 51 点の石剣が分布集成表として整理されており、基部の形状による分類（A 形式（有茎式）、B 形式（有柄式）、C 形式（無茎無柄式）、D 形式（柳葉形））がなされた。中でも出土磨製石剣の大多数を占める A 形式（有茎式）、B 形式（有柄式）についてそれらは「形式論的」に同系統に属し、細形銅剣又は鉄剣を祖型とするものとみた。分布状況にも違いがあるとし、A 形式は朝鮮半島西北部を中心分布域とし、B 形式は漢江流域以南に広く分布する〔有光 1939〕。

その後、1945 年の第二次世界大戦の終焉以降にも有光は朝鮮半島にしばらく滞在することになったが、朝鮮半島における社会の混乱や朝鮮戦争勃発によって考古学調査・研究自体が行える状態になかった〔李鮮馥 1988〕。その中で 1953 年以降、有光は梅原考古資料の整理を進める中で石剣研究を再開した〔有光 1956〕。1955 年の論考では既存に示した基部の形状による分類基準に剣身の樋の有無という要素を加えて型式を細分させ、有樋の

ものから無樋のものへの変化を考えた〔有光 1955〕。この時点で検討対象となった磨製石剣の数は 150 点を越える。磨製石剣の祖型については朝鮮半島における青銅剣の分布状況と樋を有する磨製石剣を根拠に細形銅剣に求めている。磨製石剣と細形銅剣の共伴が見られない点については、「夫々を産出した社会が別個の生活基盤に属していた」ためとした〔有光 1956〕。

上記の一連の研究をまとめたものが 1959 年の『朝鮮磨製石剣の研究』である。205 点の磨製石剣の図面を提示し、それを基に型式分類と分布、出土遺構（埋葬遺構）について検討するなど体系的な研究を行った。この研究に対する詳細な評価は既存の論考〔甲元 1972a・b、田村 1988、金 1996、朴 2004、孫 2006〕で言及されておりここでは重複させないが、1959 年の『朝鮮磨製石剣の研究』刊行以降、有光教一の研究を軸にして朝鮮半島出土の磨製石剣研究が進められていくこととなる。

Ⅲ期：『韓国支石墓研究』の刊行を前後して有光教一の学説を巡り日韓の研究者が論考を発表、型式分類・祖型を中心に論議（1959～1980年代初）

この時期は『朝鮮磨製石剣の研究』刊行を受けて、有光の見解に対する反応（賛否共に）が提起された時期であり、研究者ごとに様々な型式分類案と祖型に対する考えが披瀝された。

平井尚志は沿海州出土の磨製石剣を紹介し、朝鮮半島出土品との比較を試み、有柄式石剣の存在・青銅利器の模倣・スレート質石材の使用などの類似点を指摘している〔平井 1961〕。

金良善はいち早く有光の研究に対する反応を見せ、有光の型式分類案を基にさらに細分化を行った。またそれぞれ細分化した石剣の型式ごとに細形銅剣・銅矛、銅戈、中国式銅剣など多様な祖型を想定した〔金 1962〕。

田村晃一も有光の見解について、特に方法論上の問題点を指摘した。つまり、無樋式より有樋式が古いといえるのかという点、細形銅剣と磨製石剣が同時代のものであるかといえるかという点について証拠資料の提示が必要であるとした〔田村 1963〕。

1967 年に『韓国支石墓研究』が刊行されたが、この研究報告書は単に青銅器時代墓制研究の転換点となっただけでなく磨製石剣研究にも重要な意味を持った。つまり、京畿道坡州玉石里遺跡オクソンリの卓子式支石墓調査時、その下層で確認された長方形住居址から有樋有節柄式石剣が出土し、これと共伴した建築部材と考えられる木炭片に対する C14 年代測定値（2590 ± 105 B. P.）が公表された〔金・尹 1967〕。その結果、磨製石剣の年代が遅くとも紀元前 6 世紀後半に遡る可能性が提示され、細形銅剣の年代よりさかのぼることが示された。

翌年、有光は年代測定試料と石剣の共存関係について認めつつ、木材の伐採年代や転用の可能性も想定し、測定値がすぐさま石剣の年代にならないという考えを示し、それとと

もに細形銅劍の年代を遡らせることで玉石里支石墓下層出土の磨製石劍との年代差は解決できるとした。また、有樋式石劍の形態的特徴と分布状況から細形銅劍模倣説を強調し、金載元・尹武柄の見解に反論した〔有光 1968a・b〕。

その後、『韓国支石墓研究』での調査・研究成果を基に韓国人研究者を中心に型式分類と磨製石劍の祖型をめぐる論考が持続的に発表されていった。

金元龍は無樋一段柄式が最も古い形態でありオールドス式銅劍を模倣したものとし、有樋有茎式石劍については朝鮮半島西北部の地方型式として細形銅劍を模して出現したものとした〔金 1971〕。

甲元眞之は 1972 年・翌 73 年と立て続けに論考を発表した〔甲元 1972a・b・1973〕。有光の分類と編年に関する研究成果を受け入れつつ、土器の編年研究の成果〔黄 1958・1966、後藤 1971〕を基に有茎式石劍の起源問題と製作年代について言及した。樋の有無によって祖型が異なるとし、平安南道金灘里遺跡出土のような有樋のものは河南省瑠璃閣第 111 号墓や洛陽中州路第 2415 号墓出土品のような柱背式銅劍、黄海北道新興洞遺跡出土のような無樋のものは長安張家坡 206 号墓出土銅劍と関連するとした。年代については紀元前 6 世紀前後とした〔甲元 1972a〕。有柄式石劍については細形銅劍を模倣したものとし、樋の有無は時間差ではなく、先行する有樋・無樋有茎式石劍とつながるものとした〔甲元 1972b〕。

全栄来は全羅北道完州上林里出土の桃氏劍を報告するなかで、これを磨製石劍の祖型とみた〔全 1976〕。その成果を踏まえて全羅北道出土の有柄式磨製石劍を報告し、型式分類を行った〔全 1979〕。

尹徳香は石劍の型式差を時間差ではなく地域差と認識し、実用品として無樋有茎式・二段柄式があり、墳墓の副葬品として有樋有茎式石劍・一段柄式が製作されたと石劍の機能面について述べた〔尹 1977〕。

金永夏は磨製石劍の編年研究、祖型問題をめぐる既存の研究について「磨製石劍と伴出する一括遺物のセット関係を糾していない」点を批判し、当時進みつつあった無文土器の編年研究の成果を取り入れて、細形銅劍を祖型とすることができないとした〔金 1978・1979〕。

金昌鎬は有柄式石劍の型式分類を試みたが、その基準として鏑部の研磨方法、柄部形態、段と節の形態、樋の有無を挙げて 14 型式に分けた。ここに石鏃や無文土器など共伴遺物を加味して 2 つの時期に大別した〔金 1981〕。

IV 期：研究方法の再検討、蓄積する磨製石劍資料を用いて本格的な型式分類と編年案が提示（1980 年代初～ 1990 年代半ば）

この時期は磨製石劍が徐々に蓄積しつつある状況を反映してそれらの資料を用いて既存の研究よりさらに具体化した型式分類案と編年案が提示された。一方で以前の時期に見ら

れた過度に細分化された分類に対する批判的見解が提示されるなど研究方法の再検討が試みられた時期であるといえる。

全榮来は朝鮮半島の磨製石剣・石鏃について既存の研究に比べ多量の資料を集め非常に細かい型式分類を行い、その変遷過程を示した。また祖型については複数の形態を含む「中国式銅剣」と琵琶形銅剣に求めた〔全 1982〕。

鄭聖姫は東亜大学校博物館所蔵の慶尚南道出土の磨製石剣を紹介し、分類・編年を試み磨製石剣の年代的位置を推定した〔鄭 1983〕。

田村晃一は 80 年代後半までの日韓両国の研究者による磨製石剣の研究を総括し、既存の研究の問題点、特に方法論、分類方法について明確かつ鋭く指摘している。考古学研究の手續きとして石剣の型式論的検討が優先され、それを経たうえで年代、分布に対する検討をふまえて祖型を探求することが筋道であるとした。型式分類について、有茎式石剣は茎の長さとはかりの有無によって 3 型式、有柄式石剣については柄部の形態と剣身の形態、樋の有無によって 5 型式、計 8 つの型式に分類した。さらに有茎式・有柄式石剣間の剣身の形態比較を通して両者の関係を述べ、有柄式石剣のうち有茎式石剣と関連を持つもの(田村分類の有段柄一式)とこれとは異なる系譜の石剣(田村分類の有節柄式と無段柄式あるいは有段柄二式)があることを指摘した〔田村 1988〕。

沈奉謹は磨製石剣を有茎式、有柄式(段・節の有無によって細分)に大別し、それぞれの外形的特徴と共伴遺物の検討を基に 5 段階に分けて磨製石剣の形態的变化を具体的に提示した〔沈 1989〕。その後中国東北地域、日本列島出土の資料を含めて再検討を行っている〔沈 1994〕。

李白圭は青銅剣と磨製石剣との形態上の類似性のみを取り上げて祖型を論ずることの問題点を指摘し、磨製石剣に対する型式学的分類と出土遺跡・共伴遺物の検討を通した相対編年を樹立したうえでの祖型論の必要性を喚起した〔李 1991〕。

金仙宇は 1990 年代前半までの磨製石剣に関する研究動向を整理している〔金 1994〕。

磨製石剣自体に対する研究ではないが、岩壁や支石墓の上石に描かれた岩刻画に見られる石剣・石鏃について宋華燮はそれらが農耕社会において権威を象徴するものであり、崇拜の対象となっていたとした〔宋 1994〕。

V 期：祖型論に関する中国東北地域の考古資料提示、大規模発掘調査の進行による詳細な出土状況が分かる資料の増加と副葬・儀礼行為に対する研究の開始(1990 年代後半～2004 年)

この時期は朝鮮半島出土磨製石剣の祖型に対するより具体的な資料が提示され新たな見解が出された。また、副葬・儀礼行為の道具として磨製石剣の性格付けが試みられはじめた時期でもある。

朝鮮半島磨製石剣の起源、祖型に関する論議は研究の初期段階から続いていたが、1990

年代以降中国東北地域の考古学的情報が明らかになるとともに、該当地域からその祖型を求ようとする研究が発表された。

金邱軍は詳細な型式分類を行い、分布論や銅剣と石剣の剣身の比較、石剣が描かれた岩刻画などを提示しつつ磨製石剣の祖型として琵琶形銅剣を挙げている〔金 1996〕。

近藤喬一は慶尚南道義昌郡（現、昌原市馬山会原区内西邑）^{ピョングンリ}平城里や蔚山彦陽面東部里^{トンプリ}180番地出土の有樋二段柄石剣は遼寧省寧城^{シヤオヘイシーゴウ}小黑石溝M 8501 石槨墓出土琵琶形銅剣をモデルにしたものと指摘した〔近藤 2000〕。

李栄文は全羅南道出土の磨製石剣を主材料に出土遺跡の種類ごとに共伴遺物を加味して型式分類と編年を行った。全羅南道地域内の相互に距離を置く支石墓から形態的類似性の高い磨製石剣が出土していることから石剣製作工人や交易の存在を想定し、石剣の用途・機能についても具体的な資料を提示しつつ言及した〔李 1997〕。

1990年代以降続く大規模発掘調査の正式報告書が刊行され磨製石剣資料が増加したが、出土遺構の種類や詳細な出土状態が分かる事例が増えたことをうけて、磨製石剣の出土状況を基に副葬行為や儀礼行為の復元を試みる研究が始まった。

趙栄済と河仁秀は磨製石剣・石鏃を意図的に複数の破片に割って、被葬者のそば（棺内）と棺外の墓壙内など他の空間に埋納する風習の存在を指摘し、それらを「破剣・破鏃」という用語を用いて性格付けを行った〔趙 1998、河 2000〕。

後藤直は初期農耕社会における副葬行為の意味について論じるなかで支石墓から出土する磨製石剣の性格について、指導者・首長の所有物であり「武器として他の共同体との交渉における優位を獲得する力、人々を結集させる力、共同体を害する諸々の邪悪を払う力の象徴物であり、死後にも不可欠なものとして副葬させる必要があった」と武器としての象徴性に起因する複数の性格を推定した〔後藤 2000〕。

金宰賢は南江ダム水没地域に対する発掘調査で確認された人骨に対する形質人類学的調査の結果を報告するなかで、磨製石剣が副葬された^{ホンチョンリ}本村里2号石棺墓から検出された人骨が30代女性のものであると鑑定され、石剣の副葬が女性にも行われていたことを知られるようになった〔金 2002〕。

VI期：朴宣映・孫峻鎬による研究の進展と研究方向の多様化（2004年以降～現在）

この時期は持続的な発掘調査資料の増加を背景に墳墓・住居址から出土状態の分かる資料が増加し、磨製石剣特に有柄式石剣の編年研究が進むとともに、副葬状態に対する検討を基に青銅器時代社会において磨製石剣が有した意味・意義付けが試みられた時期である。また、朝鮮半島内の地域ごとの磨製石剣の様相に対する研究、沿海州出土石剣の集成・再検討など研究対象地域の細分化・拡大がみられる。

それまで多くの研究者によって磨製石剣の分類と編年研究が進められてきたが、既存の有柄式石剣の型式分類案・編年案変遷をより具体的に提示するとともに墳墓での共伴遺物

による型式変遷の妥当性を検討し、研究水準を一段階高めたのは朴宣映の研究である〔朴 2004・2009〕。

孫峻鎬は 1990 年代以降の爆発的に増加した青銅器時代磨製石器資料を整理し体系的な研究を進めている〔孫 2006b・c〕。磨製石剣については近年、その起源・祖型に対する論考を発表している〔孫（庄田訳）2006、孫 2008・2012〕。

日本人による磨製石剣を扱った研究は 2004 年の国立歴史民俗博物館が発表した弥生時代開始年代を巡る論争の一環として進められた。つまり、磨製石剣の祖型とその年代と関連して遼寧地域、朝鮮半島、日本列島をつなぐ年代推定根拠として磨製石剣に対する検討が行われた〔武末 2004、宮本 2004、柳田 2004、庄田 2005、岩永 2005・2011〕。

その中で宮本一夫は東北アジアにおける磨製石剣の出現過程を簡潔明瞭に説明している。有茎式石剣は鈴首剣（宮本分類の B 1 式銅剣）を模倣して遼東・朝鮮半島北部で成立し、二段柄式石剣は近藤喬一が示したように遼西の琵琶形銅剣（宮本分類の C 1 式銅剣）と関連付けた〔宮本 2004〕。

資料の増加は朝鮮半島内での地域別、具体的には全羅道〔成 2005〕、錦江流域〔劉 2006〕、北朝鮮地域〔孫 2006a〕、忠清北道〔姜 2006〕の磨製石剣に対する研究が進む一因をもたらした。

そして、過去に比べ調査精度が高まったことで、遺構内外での詳細な出土状況や琵琶形銅剣など他の副葬品とのセット関係が分かる資料も蓄積した。それらの資料を用いて磨製石剣の機能や性格付けを試みた研究が前時期に比べ増加した。

裴眞晟は二段柄式石剣の分類と編年を通して、それが琵琶形銅剣を祖型とし銅剣の代用物として出現し、磨製石剣の出現と墳墓への副葬は青銅器時代社会の階層分化と連動するものとした（裴 2006）。

筆者は嶺南地域における墳墓出土磨製石剣の出土状態を分類し、その性格付けを行った〔平郡 2006・2008a・b・2009〕。

朝鮮半島磨製石剣の中で地域的特徴を持つものに対する個別の研究も行われている。

黄昌漢は柄部に穴が陰刻されたり把頭があるものを装飾石剣と命名し、その集成と型式分類を行い、変遷過程を示した。また、装飾石剣と青銅器時代岩刻画の分布圏との比較から相互の関連性を想定した〔黄 2008〕。

また、有節式石剣に対する基礎的検討を通して支石墓において埋葬儀礼を共有するネットワークが形成されていたことを指摘した研究もある〔張・平郡 2009〕。

この時期には墳墓以外からの出土事例も増加し、朝鮮半島南部地域の青銅器時代住居址から出土した磨製石剣の集成的研究も行われている〔李 2011〕。

研究対象地域も朝鮮半島以外に拡大し、1960 年代以来となるロシア沿海州出土の磨製石剣に対する再考〔姜 2011〕と当該地域出土の磨製石剣の集成という基礎的作業が進められた〔Oksana Yanshina・Shinya Shoda2013〕。

3. 結語

以上で、朝鮮半島における磨製石剣研究の流れを概観した。

19世紀後半に朝鮮半島の磨製石剣に対する関心が始まり、有光教一による基礎的研究は1930年代後半を皮切りにし、その集大成として1959年に『朝鮮磨製石剣の研究』が刊行された。そこで提示された磨製石剣の型式分類、年代、分布、祖型論についてはその後多くの研究者によって多くの批判を受けたが、型式分類の大枠は現在も用いられており、その影響は少なくない。1990年代以降の大規模開発に伴う大規模発掘調査の急増は検討対象資料の質の高まりをもたらし、分類・編年のみならず青銅器時代における磨製石剣の社会的機能など多様な側面についても言及しようとする試みが見られるようになった。

今後の課題のひとつとして、磨製石剣の製作・流通に関する問題がある。数多くの磨製石剣が出土しているが、出土遺構の大部分は支石墓、石棺墓などの埋葬遺構である。住居址からの出土品も存在するが、磨製石剣の製作過程を詳細に示すような資料は現在のところ未確認である。今後も資料が持続的に増加すれば製作と関連した資料が発見されることが期待され、それらの資料を基に磨製石剣の流通についても言及することが可能となろう。

研究視角・目的の大きなビジョンとして庄田慎矢・寺前直人が指摘〔庄田・寺前2012〕しているように「内的には武器、武威の社会的機能やその所有による階層化の進展、外的には素材獲得と生産技術の高度化による物流を介した中心・周辺関係の形成」などを見通した研究目的の設定が必要であろう。ただそれらを解明していくうえで最優先されるべき朝鮮半島出土磨製石剣の集成がまだ行われていないという点をまずクリアしていく必要を痛感している。その作業を通して朝鮮半島出土磨製石剣の特徴、それをういた社会の特質について明らかにしていくことが今後の課題であると考えられる。

【島根大学法文学部】

文献収集において趙晟元氏、松永悦枝氏、朴俊炫氏、李惠遠氏から援助を頂いた。末尾ながら感謝いたします。

本稿は平成25年度公益財団法人韓昌祐・韓哲文化財団助成金『韓半島出土磨製石剣の集成的研究』による支援を受けて作成した。

〔参考文献〕（年代順） 韓国語論文は便宜上、題目を日本語に翻訳した。

神田孝平 1886 「雑記」『東京人類学会報告』第10号 東京人類学会

八木契三郎 1914 「朝鮮の磨石器時代」『人類学雑誌』第29巻第12号 東京人類学会

八木契三郎 1915a 「朝鮮の磨石器時代（続）」『人類学雑誌』第30巻第2号 東京人類学会

八木契三郎 1915b 「朝鮮の磨石器時代（続）」『人類学雑誌』第30巻第5号 東京人類学会

鳥居龍蔵 1915 「Populations Préhistoriques de la Mandchourie Meridionale」『東京帝国大学理科大学紀要』

鳥居龍蔵 1917 「平安南道黄海道古蹟調査報告」『朝鮮総督府大正五年度古蹟調査報告』朝鮮総督府編

- 梅原末治 1922 「南鮮発見の銅劍銅矛」『人類学雑誌』第37巻第1・2・3号 東京人類学会
- 梅原末治 1922 「鳥取県下に於ける有史以前の遺跡」『鳥取県史蹟名勝地調査報告』第1冊 鳥取県
- 高橋健自 1925 「第十一章 石劍との関係」『銅鉦銅劍の研究』聚精堂書店
- 藤田亮策 1937 「第五 大邱大鳳町支石墓調査」『昭和十一年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会
- 藤田亮策 1940 「第七 大邱大鳳町支石墓調査（第二回）」『昭和十三年度古蹟調査報告』朝鮮古蹟研究会
- 有光教一 1938 「朝鮮江原道の先史時代遺物」『考古学雑誌』第28巻第11号 日本考古学協会
- 有光教一 1939 「朝鮮に於ける磨製石劍の形式と分布」『人類学雑誌』第54巻第5号 東京人類学会
- 鳥居龍藏 1953 『ある老学徒の手記—考古学とともに六十年—』朝日新聞社
- 佐野大和 1953 「磨製石劍」『国学院雑誌』54-1
- 有光教一 1955 「南朝鮮土着文化の考古学的考察」『史林』第38巻第6号 史学研究会
- 有光教一 1956 「朝鮮出土の磨製石劍：細形銅劍を模した一群について」『京都大学文学部研究紀要』
4 京都大学文学部
- 黄 基徳 1958 「朝鮮西北地方の原始土器の研究」『文化遺産』1958年4号
- 有光教一 1959 『朝鮮磨製石劍の研究』京都大学文学部考古学叢書第2冊
- 平井尚志 1961 「沿海州出土の磨製石劍について—朝鮮出土例との比較と検討—」『朝鮮学報』第18
輯 朝鮮学会
- 金 良善 1962 「再考を要する磨製石劍の形式分類と祖形考定の問題」『古文化』第1輯
- 田村晃一 1963 「朝鮮半島の角形土器とその石器」『考古学研究』10-2
- 黄 基徳 1966 「西北地方コマ形土器遺跡の年代について」『考古民俗』1966年4号
- 金 載元・尹 武炳 1967 『韓国支石墓研究』国立博物館古蹟調査報告書第6冊
- 増田精一 1968 「分布と文化系統」『新版考古学講座』（1）通論上
- 有光教一 1968a 「韓国支石墓研究を読んで」『朝鮮学報』第48輯 朝鮮学会
- 有光教一 1968b 「朝鮮磨製石劍の年代論について」『史林』
- 金 元龍 1971 「韓国磨製石劍の起源に関する一考察」『白山学報』10号 白山学会
- 甲元真之 1972a 「朝鮮半島の有茎式磨製石劍」『古代文化』第24巻第7号 古代学協会
- 甲元真之 1972b 「朝鮮半島の有柄式磨製石劍」『古代文化』第24巻第9号 古代学協会
- 甲元真之 1973 「東北アジアの磨製石劍」『古代文化』第25巻第9号 古代学協会
- 全 榮来 1976 「完州上林里出土中国式銅劍に関して」『全北遺跡調査報告』6 全州市立博物館
- 尹 徳香 1977 「韓半島磨製石劍の一考察」ソウル大学校考古学科硕士学位論文
- 金 永夏 1978 「磨製石劍存疑」『考古美術』136・137 合号
- 金 永夏 1979 「磨製石劍の祖型に関して」『韓国史研究』24 韓国史研究会
- 全 榮来 1979 「全北地方磨製石劍出土例と諸問題の提起」『考古学』5・6 合集
- 金 昌鎬 1981 「有柄式石劍型式分類試論」『歴史教育論集』第二輯 慶北大学校師範大学歴史科
- 武末純一 1981 「朝鮮磨製石劍の再検討」『古文化研究会会報』29 九州古文化研究会
- 全 榮来 1982 「韓国磨製石劍・石鏃の編年に関する研究」『馬韓百濟文化』4・5 合集 円光大馬韓
百濟文化研究所
- 角林文雄 1982 「磨製石劍論争私見」『古代学研究』97 古代学研究会
- 安 春培 1983 「山清黙谷里出土磨製石劍に対する考察—磨製石劍の編年に関する考察—」『古文化』
22 韓国大学博物館協会
- 鄭 聖姫 1983 『慶南地方出土磨製石劍に対する一考察』東亜大学校史学科硕士学位論文
- 沈 奉謹 1984 「密陽南田里と義昌平城里遺跡出土遺物」『尹武炳博士回甲紀念論叢』

- 角林文雄 1985 「磨製石剣論争私見補論」『古代学研究』108 古代学研究会
- 小泉顕夫 1986 「第7章 支石墓の調査」『朝鮮古代遺跡の遍歴』六興出版
- 李 鮮馥 1988 「第10章 考古学の社会学」『考古学概論』理論と実践社（定森秀夫・平郡達哉・市元壘訳 2004 「韓国考古学の回顧と展望」『古文化談叢』50 一 下 九州古文化研究会）
- 田村晃一 1988 「朝鮮半島出土の磨製石剣について」『東京国立博物館美術誌 MUSEUM』No. 452
- 沈 奉謹 1989 「日本弥生文化初期の磨製石器に対する研究－韓国の磨製石剣と関連して－」『嶺南考古学』6 嶺南考古学会
- 李 白圭 1991 「4. 石製武器 [1] 韓国」小田富士雄・韓炳三篇『日韓交渉の考古学－弥生時代編－』六興出版
- 沈 奉謹 1994 「東北アジアにおける磨製石剣の分布とその性格」『東アジアの青銅器文化』文化財研究所
- 金 仙宇 1994 「韓国磨製石剣の研究現況」『韓国上古史学報』16 韓国上古史学会
- 宋 華燮 1994 「先史時代岩刻画にあらわれた石剣・石鏃の様式と象徴」『韓国考古学報』31 韓国考古学会
- 金 邱軍 1996 「韓国产石剣の研究（1）」『湖巖美術館研究論文集』1 湖岩美術館
- 李 榮文 1997 「全南地方出土磨製石剣に関する研究」『韓国上古史学報』24 韓国上古史学会
- 趙 榮濟 1998 「泗川本村里遺跡」『南江ダム水没地区の発掘成果』嶺南考古学会
- 後藤 直 2000 「朝鮮青銅器時代」『季刊考古学』第70号 雄山閣
- 近藤喬一 2000 「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史資料編考古』山口県
- 李 相吉 2000 『青銅器時代儀礼に関する考古学的研究』大邱暁星カトリック大学校大学院博士学位論文
- 河 仁秀 2000 「南江流域無文土器時代の墓制」『晋州南江遺跡と古代日本』慶尚南道・仁済大学校加耶文化研究所
- 金 宰賢 2002 「人骨からみた南江大坪人」『青銅器時代の坪・大坪人』国立晋州博物館特別展示図録
- 大島隆之 2003 「韓国無文土器時代磨製石器の時期差と地域差」『古文化談叢』50 一 上 九州古文化研究会
- 朴 宣映 2004 『南韓出土有柄式石剣研究』慶北大学校大学院考古人類学科硕士学位論文
- 柳田康雄 2004 「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」『九州歴史資料館研究論集』29 九州歴史資料館
- 庄田慎矢 2004 「韓国嶺南地方南西部の無文土器時代編年」『古文化談叢』50 一 下 九州古文化研究会
- 宮本一夫 2004 「中国大陸からの視点」『季刊考古学』88 雄山閣
- 武末純一 2004 「弥生時代前半期の暦年代－北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える－」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』
- 岩永省三 2005 「弥生時代開始年代再考」『九州大学総合研究博物館研究報告』3 九州大学総合研究博物館
- 庄田慎矢 2005 「湖西地域出土の琵琶形銅剣と弥生時代の開始年代」『湖西考古学』12 湖西考古学会
- 成 璟瑯 2005 『韓国南西部地域支石墓出土石剣』全南大学校大学院硕士学位論文
- 裴 眞晟 2006 「石剣出現のイデオロギー」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』釜山考古学研究会論叢刊行委員会

- 平郡達哉 2006 「慶南地域無文土器時代棺外副葬に関する一考」『石軒鄭澄元教授停年退任記念論叢』釜山考古学研究会論叢刊行委員会
- 劉 香美 2006 「青銅器時代錦江流域出土磨製石剣に対する分析—支石墓と石棺墓・(石蓋) 土壙墓出土品を中心に—」『研究論文集』第7号(財)湖南文化財研究院
- 孫 峻鎬 2006a 「北韓地域青銅器時代の磨製石器の変化相」『湖西考古学』14 湖西考古学会
- 孫 峻鎬 2006b 『韓半島青銅器時代磨製石器研究』高麗大学校博士学位論文
- 孫 峻鎬 2006c 『青銅器時代磨製石器研究』書景文化社
- 孫 峻鎬(庄田慎矢訳) 2006 「韓国青銅器時代磨製石器研究の回顧と展望」『古文化談叢』第55集九州古文化研究会
- 姜 元杓 2006 「忠北地域磨製石剣検討」『考古学誌』第15輯 韓国考古美術研究所
- 孫 峻鎬(庄田慎矢訳) 2008 「朝鮮半島における磨製石剣の展開と起源について」『地域・文化の考古学下條信行先生退任記念論文集』下條信行先生退任記念事業会
- 朴 美賢 2008 『有柄式磨製石剣の展開と地域性研究』釜山大学校大学院碩士學位論文
- 平郡達哉 2008a 「朝鮮半島嶺南地域における副葬磨製石剣の性格」『王權と武器と信仰』(菅谷文則編)同成社
- 平郡達哉 2008b 「嶺南地域‘剣形磨製石器’副葬の意味に対する考察」『COGITO』64 釜山大学校人文学研究所
- 黄 昌漢 2008 「青銅器時代裝飾石剣の検討」『科技考古研究』第14号 亜州大学校博物館(平郡達哉訳 2015 「朝鮮半島青銅器時代における裝飾石剣の検討」『社会文化論集』第11号 島根大学法文学部社会文化学科)
- 平郡達哉 2009 「朝鮮半島無文土器時代の棺外副葬—慶南地域の事例—」『花園大学考古学研究論叢Ⅱ』花園大学考古学研究室
- 張 龍俊・平郡達哉 2009 「有柄式石剣からみた無文土器時代埋葬儀礼の共有」『韓国考古学報』72集 韓国考古学会
- 朴 宣映 2009 「朝鮮半島中南部における有柄式石剣の編年と地域性」『考古学研究』第56巻第1号 考古学研究会
- 黄 昌漢 2010 「嶺南地域青銅器時代の武器について」『第19回嶺南考古学会学術発表会』発表要旨嶺南考古学会
- 岩永省三 2011 「弥生時代開始年代再考Ⅱ—青銅器年代論から見た—」九州大学総合研究博物館研究報告」9 九州大学総合研究博物館
- 姜 仁旭 2011 「ロシア沿海州出土石剣の研究—型式、編年および韓半島との比較を中心に—」『東北亜文化研究』第28集
- 李ジェウン 2011 『南韓地域青銅器時代住居址出土石剣研究』木浦大学校考古人類学科碩士學位論文
- 庄田慎矢・寺前直人 2012 「特輯『東北アジアの武器形石器』に寄せて」『古代文化』第64巻第1号 財団法人古代学協会
- 孫 峻鎬(庄田慎矢訳) 2012 「朝鮮半島の銅剣模倣石剣」『古代文化』第64巻第1号 財団法人古代学協会
- Oksana Yanshina・Shinya Shoda 2013 『Weapon-Shaped Stone Tools from the Russian Far East: The Museum Collections』